

ベストセラー作家・福沢諭吉の著書における統計の用例

奥積 雅彦（国立国会図書館支部総務省統計図書館長）

「統計」や「統計学」は、西欧から移入され、明治の初めまで日本にはなかった新たなコトバです。筆者は統計資料館で行う明治 150 年記念事業に関わることとなり、明治期に出版された福沢諭吉の著書において、統計に関する用語がどのように表記されているかについても調べる機会に恵まれました。本稿ではその一端を紹介します。

1 福沢諭吉の著書における「統計」に係る用語の掲載状況

福沢諭吉の著書における「統計」に係る用語の掲載状況を調べた結果は、次の表のとおりです。調べ方は、慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクションに掲載の福沢の著書について、当該サイトの検索機能を利用して「統計」の用語をキーワードとして検索することにより行いました。

●福沢諭吉の著書における「統計」に係る用語の一覧表

出版時期	書名	統計に係る用語 :掲載頁のコマ(国立国会図書館デジタルコレクション)
(1860)万延元年	万国政表 ³	政表¹ 注:凡例において「 スターチステ 、ターフル、ファン、アルレ、ランデン、デル、アホルデ」を「万国政表」の義としている
(1871)明治4年7月伊藤博文の建議に基づき大蔵省に 統計司 を置く(8月 統計寮 と改称)		
(1871)明治4年12月太政官正院に 政表課 を置く		
(1873)明治6年1月「附音挿図英和字彙」初版で、「Statistics」を「国誌、 統計表 、国誌学」と訳す。		
(1874)明治7年6月モロー・ド・ジョンネ著、箕作麟祥訳「 統計学 」(文部省)出版 ※第1巻の凡例において、統計学について「此學原名 スタチスチック ト云ヒ其説ク所ハ皆算數ヲ以テ國內百般ノ事ヲ表明シ治國安民ノ為メ最緊要ノ者タリ」と記述。		
(1874)明治7年10月シモン・ヒッセリング述、津田真道訳の「 表紀提綱一名政表学論 」を刊行する		
(1874)明治7年12月	学問のすゝめ ³ (第13編)	スタチスチックの表²
(1875)明治8年4月	文明論之概略 ³ 卷之2	スタチスチック : 12 コマ スタチスチックの表 : 13 コマ
(1877)明治10年11月	分権論 ⁴	統計表 : 60 コマ スタチスチック : 60 コマ
(1877)明治10年12月	民間経済録 ⁵ 初編	統計 : 42 コマ 3府60県の明治7年中の盜賊の害に係るデータを引用(明治7年日本政表)

¹ 磐田市立図書館(静岡県)の電子書籍サービス「万国政表」の5コマ

² 慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション(デジタルで読む福澤諭吉)「学問のすゝめ(第13編)」の8コマ

³ 総務省統計局HP「統計の黎明とその歴史」の「統計の偉人たち(福澤諭吉)」参照

⁴ 「分権論」は、明治政府の中央集権的傾向を批判して、政治を分けて、政権は中央政府の手に収め、治権は地方に移譲して人民自治の気風を興すべきことを説いたもの

⁵ 「民間経済録」は、初学のための経済原論ともいふべきもの。西洋学説丸抜きの経済論の行われていたその当時あって、日本経済の実状に即した経済論を展開している点に注目すべき著書

出版時期	書名	統計に係る用語 :掲載頁のコマ(国立国会図書館デジタルコレクション)
(1878)明治11年5月	通貨論 ⁶	統計局 : 19 コマ 明治元年～同4年の外国米の輸入に係る統計データを引用
(1879)明治12年8月	福澤文集 ⁷ 二編 巻二	統計表 : 30 コマ
(1880)明治13年8月	民間経済録 二編	統計表 : 55 コマ
(1881)明治14年5月 太政官に統計院設置		
(1881)明治14年9月	時事小言 ⁸	統計、統計表 ⁹
(1882)明治15年 統計院「統計年鑑」出版		
(1884)明治17年1月	全国徴兵論 ¹⁰	統計年鑑 : 8 コマ 注 : 統計年鑑の明治13年人口を引用 統計 : 26 コマ
(1885)明治18年12月	士人處世論 ¹¹	統計表 : 6 コマ
(1886)明治19年 統計院は廃止、内閣に統計局設置		
(1889)明治22年 森鷗外と今井武夫の統計訳字論争		
(1892)明治25年6月	国会の前途・国会難局の由来・治安小言・地租論 ¹²	統計、統計表 ¹³
(1897)明治30年7月	福翁百話 ¹⁴	統計 : 18 コマ、68 コマ、161 コマ、162 コマ 統計学 : 131 コマ

⁶ 「通貨論」は、西南戦争による紙幣増発のため銀紙の間が著しく開いた通貨価値の急変に対する時事評論で、福沢はこの書を著わすために大蔵省の金庫を見学し、日本貨幣の沿革や西洋諸国の通貨事情に関する文献を大蔵卿大隈重信の手を通じて借り出して研究し、冒頭の一節だけは慶應義塾から出ていた「民間雑誌」と題する日刊新聞に発表した。その続稿は書き卸しのまま単行本として出版したもの

⁷ 「福澤文集」は、「家庭叢談」、「民間雑誌」その他の新聞雑誌に寄稿した福沢の短い文章や演説の原稿などを集めた文集

⁸ 「時事小言」は、初め「国会論」の続編のつもりで起草され、後に「時事小言」と題して明治14年の秋に出版されたもの

⁹ 慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション(デジタルで読む福澤諭吉)「時事小言」。統計 : 130 コマ、204 コマ、313 コマ、統計表 : 306 コマ

¹⁰ 明治16年4月5日から7日まで3回にわたって「全国兵は字義の如く全国なる可し」と題する社説を連載し、次いで明治17年1月4日から7日まで三回にわたり「改正徴兵令」と題する社説を掲げ、「全国徴兵論」は、これらの二編の社説を併せて一本にまとめ明治17年1月に刊行したもの

¹¹ 「士人處世論」は、明治の士人が立身の道をひたすら官途に求めて政府の小吏となって満足するが如き風潮を批判し、士人処世の方向は官途以外に無限に広いことを論じたもの

¹² 「国会の前途・国会難局の由来・治安小言・地租論」は、明治22年の憲法発布以来「時事新報」は社説に帝国議会のことに論及するものが少なくなかったが、その代表的論説四編を一編としてまとめたもの

¹³ 慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション(デジタルで読む福澤諭吉)「国会の前途・国会難局の由来・治安小言・地租論」。統計 : 50 コマ、100 コマ、統計表 : 113 コマ

¹⁴ 「福翁百話」は、福沢が随時、客と談話した話題を書きとめておいたものの中から百題を選んでとりまとめたもの

2 福沢諭吉の著書における「統計」に係る用語の具体的な掲載内容

福沢諭吉の著書における「統計」に係る用語の具体的な掲載内容の一部を紹介します。

(1) 「分権論」

明治10年(1877年)出版の「分権論」で「統計表」、「スタチスチック」が用いられており、調べた範囲では、福沢諭吉の著書で最初に「統計」の用語が登場しています。

● 「分権論」で「統計表」、「スタチスチック」が用いられている箇所

【60 コマ】

附 録

一 本編は地方分権の大略を論じたるものなれども、分権の議論あれば分財の議論も亦なかるべからず。蓋し権と財とは大概その通行の路を共にして、権の集る所には財も亦集り、権の分るゝ所には財も亦共に分るゝものなり。故に今別に一編の分財論を著して、始めて本編の意を全うすべしと雖ども、理財の事を吟味するには、先ず**統計表**の詳なるものなかるべからず。即ち西洋に所謂「**スタチスチック**」是なり。然るに旧幕府の時代、固(もと)よりこの表を記したるものあらざれば、今日に在ては博く諸書を詮索して、先ず之を**統計表**の形に作り、その表を以て理財の本義に照合して、始て分財、集財の得失をも明にすべきことなれども、その事業を企てんとするも、数月の労を以て能すべきに非ず。加之維新以来の政府の会計とても、その細密なる精算を知るべからざれば、止を得ず分財の議論は之を他日に譲り、唯この議論に就き我輩が目的とする所の吟味の趣向を示すこ左の如きのみ。今日にても世上有志の士に、この吟味の路を得てよくその力を尽し、国財分集の利害得失を明〔に〕する者あらば、独り余輩の悦ぶのみならず、社会一般の大幸と云うべし。

注：【】は、国立国会図書館デジタルコレクション「分権論」の該当頁のコマ

(2) 「民間経済録」

明治10年(1877年)出版の「民間経済録 初編」において、明治初期の総合統計書である太政官調査局「明治7年日本政表」(警察の部)における3府60県の明治7年中の盗賊の害に係る統計が引用されています。調べた範囲では、福沢諭吉の著書で最初に総合統計書の統計データが引用されています。

● 「民間経済録」で明治7年中の盗賊の害に係る統計データが引用されている箇所

【初編 42 コマ】

既に日本に於ても明治七年中の**統計**に拠れば、三府六十県にて盗賊の害を蒙りたること左の如し。

殺されし人 八十六人

疵付られし人 二百八十五人

追剥、追落しに遇いし人 四百八十二人

押込に遇いし家 三千二百〇一戸

窃盗に遇いし家 九万〇四百五十八戸

附火にて焼かれし家 六百十二戸

注：【】は、国立国会図書館デジタルコレクション「民間経済録 初編」の該当頁のコマ

(3) 「通貨論」

明治11年(1878年)出版の「通貨論」で、明治元年～同4年の外国米の輸入に係る統計データが引用されています。そのデータは、東洋経済新報社「日本貿易精覧」輸入品表の「米及び麴」のデータと同じ情報源とみられます。

なお、「統計局の表」の「統計局」については、当時の政府にその名称の組織は存在しないなど、はっきりしない面もあります。

● 「通貨論」で外国米の輸入に係る統計データが引用されている箇所

【19コマ】

統計局の表に拠れば、明治元年、外国米の輸入二千〇九十七万七千二百十斤、代価四十三万五千九百五十五円、同二年、輸入一億六千二百〇七万千三百二十三斤、代価四百四十三万八千八百八十六円、同三年、輸入五億三千七百七十一万〇七百五十六斤、代価千四百五十九万八千百十四円、同四年、輸入四千九百九十五万七千八百六十斤、代価百二十六万〇百七十八円なりと云う。

(4) 「全国徴兵論」

明治17年(1884年)出版の「全国徴兵論」では、「統計年鑑」(明治15年出版)の明治13年人口が引用され、徴兵の対象となる20歳以上50歳未満の男子人口(母数)を推計しています。

● 「全国徴兵論」で「統計年鑑」の明治13年人口が引用されている箇所

【8コマ】

故に寧ろ免役料の名に代るに兵役税の文字を以てして全国の男子唯皇族を除くの外一名も免すことなく生れて二十歳に至れば三ヶ年の間身躬から役に服する歟、然らざれば三ヶ年の間兵役税を納めしめて其常備軍役を免すること公平至当の法ならんと信ず右の主義果して公平至当ならば其実施の法を案ずるに**統計年鑑**明治十三年人口の調に全国の男子二十年以上五十年未満の者七百五十八万五千百三十八名とあり之を三十分して其割合は少者の方多かるべきが故に満二十年の者は大数二十六万と仮定…(以下略)

注：【】は、国立国会図書館デジタルコレクション「全国徴兵論」の該当頁のコマ

(5) 「福翁百話」

明治30年(1897年)出版の「福翁百話」では、「統計」の用語が用いられ、統計の重要性を説いています。

● 「福翁百話」で「統計」が用いられている箇所

【161コマ】 人間社会の進歩とは凡そ右等の事情にして誠に分り切ったることなるに、彼の尚古論者が兎角古風に恋着して前進の道を知らざるこそ奇態なれ。啻に前進を知らざるのみならず、時として之を妨るに至る。その愚は殆んど測るべからざるに似たれども、元来彼輩の思想は至極簡単にして、殊に数字**統計**の何物たるを知らず、単に和漢の歴史を通読して往々自分の心に感じたる所を記憶し、是れは善し其れは悪しと判断を下して局部の善悪に眼を注ぎ、眼孔豆の如くにして全面の利害を視るの明なきが故に、知らず識らずして自か

ら迷の淵に沈むことなり。

【162 コマ】 文明進歩の目的は国民全体を平均して最大多数の最大幸福に在るのみならず、その幸福の性質をして次第に上進せしむるに在り。歴史百千年の前後を比較してこの幸福の数果して増したるや減じたるや、幸福の性質上進したるや低落したるや、即ち是れ**統計**の数字に見るべき所にして、我輩は断じてその増進を明言して尚ほ未来の望を抱く者なり。苟もこの**統計**全体の思想なき人は共に文明の事を語るに足らざるなり。

注：【】は、国立国会図書館デジタルコレクション「福翁百話」の該当頁のコマ

3 おわりに

明治10年(1877年)11月に出版された「分権論」のなかで「統計表」が用いられ、それ以降の福沢の著書では一貫して「統計」が用いられています。これは、明治7年6月に出版されたモロー・ド・ジョンネ著、箕作麟祥訳「統計学」(文部省)において「スタチスチック」を「統計学」と訳していることなども影響しているものと考えられます。

ちなみに、箕作麟祥は、元治元年(1864年)10月、外国奉行支配翻訳御用頭取を命ぜられ、福沢諭吉、福池源一郎等とともに翻訳に従事し、その後、福沢らとともに明六社(明治6年発足)のメンバーとして親交があったと考えられます。

また、例えば「民間経済録」において「明治7年日本政表」のデータを引用し、「全国徴兵論」において「統計年鑑」の明治13年の人口データを引用していることは、福沢がエビデンスとしての統計データを重視していることがうかがえます。

【福沢の著書の説明文の参考資料】慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション